

イケてる言葉

翻訳家 代田 亜香子
だいた あかこ

ヤングアダルト向け小説の翻訳をやっていると、なにより悩むのが言葉の選択です。わたしもふだんの話し言葉で「イケてる」を使うわけではありませんせんが、十代の子のセリフを訳すときに、「かっこいい」とか「すてき」の代わりに使うことがあります。もちろん、今どきのしゃべり言葉をそのまま使うことはしません。何か月後かには「ダサイ」といわれる危険性のある言葉は避けなければいけませんし、耳で聞くのと活字で読むのではだいぶ感覚が違うからです。わたしなりに、乱れた日本語は使いたくないという気持ちもあります。そうやって誰にでも通じる言葉を選びながらも、その本をいちばん読んで欲しい読者層が受け入れやすい雰囲気（決して媚びを売るのではなく）作っていきたいと思っています。

正しい日本語を知っていてきちんと使えることは、もちろんとても大切なことだと思います。ただ、「心臓がときどきした」よりも「心臓ばくばくしちゃった」のほうが、感覚にピタッとくることがあ

ります。あまりに自分たちの感覚とかけ離れていると、共感できるものもできなくなってしまうこともあると思うのです。活字離れが進んでいる今、とにかく読んでもらわなければ始まらない、という危機感さえあります。

日本語は英語よりもはるかに、言葉遣いでキャラクターを表現することができます。以前、ある本に『小公女』の引用が出てきて、主人公のセーラを今どきの女の子ふうに訳してみたことがあります。すると、私の知っているセーラとはまるで別人になってしまい、改めて言葉の力にびっくりしました。あまりに優等生のセーラは付き合いつらい相手かもしれないけれど、このセーラなら仲良くできるかもしれない……そんなふうにも感じました。

正しい言葉と変わっていく言葉、そのちょうどいいバランスを探っていけたら、と思います。